

” 平和行事参加の旅”

30代 女性

私は以前、広島に行ったことがあるのですが、他にも行きたいところがあってゆっくり見ることができなかつたので、もう一度行きたいと思い、この旅に参加しました。

広島駅に着き、最初に向かったのは爆心地。T字の形が珍しい相生橋を目標に落とされた原爆は、風に流されて市街地の上空600mで爆発しました。

当時からある建物(原爆ドーム、レストハウス)を見て、広島市はモダンでにぎわっていたのでは、と思っていました。それが一瞬で焼け野原になった事を想像し、言葉を失いました。

写真を見たり、話をきくだけでもつらく悲しい事であり、原爆の力をまのあたりにした方々の苦しみは、想像することができません。

そしてその苦しみは今もなお、世代を超えた人々の心と体をむしばんでいるとわかり、原爆は本当に恐ろしいものだと感じました。

そのような中で、海外から広島への支援が思いの外手厚かったことも知り、驚きました。

広島に家を建てたアメリカ人のシュモー氏や、親を失った子供と私的に養子縁組を結び、養育資金を送る「精神養子運動」など、さまざまな救いの手が差し伸べられていたことに心が温まりました。

そして翌日の式典では、始まる前から色々な方が祈りを捧げていましたが、8時15分になり、80ヶ国もの人々が一斉に平和を願う様子を見て、どこの国も思いは一緒なのだと実感しました。

核兵器は使われた国だけでなく周辺の国、使った国にも悪い影響を及ぼします。

国同士が武力以外の手段で信頼を築いていける、平和な世界にしたいと強く思いました。

” 平和行事参加の旅 ”

50代 女性

ピカドンが落とされた広島は今も尚、お亡くなりになられている方々がいて原爆死没者名簿には30万人を超え平和記念式典までに、2745人の方々の名前が記帳されたそうです。

私は小学生の時にまんが「はだしのゲン」を読みピカドンを知ったと思います。“ピカドン”というものは、原爆の表現だと改めて広島平和記念資料館で考えさせられました。

テレビ、ニュースなどで広島、長崎の原爆投下、平和記念式典の様子は知っていましたし十分わかっていたつもりでした。今回、実際に広島に行き、広島平和記念資料館を見学している間、「本当にわかってた？」「知ってたつもりだったんじゃないの？」「いつも平和を祈ってた？」「他人事じゃなかった？」と自問、広島と長崎以外にも原爆投下されるかもしれなかった候補地があった事、原爆投下の目標が相生橋であった事、原爆が風に流された事、展示物、資料、説明を見て読んで聞いた私にはどれ一つとして知らなかったことばかりです。

原爆投下の様子を上から見れるパノラマ映像で見た時は体に衝撃が走りました。投下からたった10秒で緑の街並みが、川が・・・変わりはてて・・・これが現実に起きたことなんだ・・・本当に恐ろしくて恐ろしくて、怖くて目をそむけたくなる程の地獄図に言葉が出ませんでした。

こんなこと二度とあってはいけない、あっていいはずがない！！

遺品、ご遺族の方々の展示には、無念があったことでしょう。怒りと悲しみが
いりまじって言い表せない感情を訴えているようでした。

そして、資料館での被爆体験伝承講話、被爆者寺前妙子さんのお話の中で、自
ら被爆し、左目が飛び出している事も気づかず必死に逃げ、川を泳ぎ意識を失い
助けられた後に、左目は無くこぶしが入るくらいの穴があいていて帰宅すると弟
さんたちから「お姉ちゃんがおばけになった、おばけになった・・・」と言われ鏡
を見せてもらえなかったという生きた証言を聞き、胸が痛くなったことも忘れら
れません。

翌日の平和記念式典への参加はこれまで以上に、記憶に残ることとなりました。

広島市の市内の路面電車にて原爆ドーム前の駅に着き電車からホームに降りた瞬
間、自然に涙が出てきてこみあげた感情は予想外で何と表現して良いのか戸惑い
ながら式典会場に向かいました。

式典でのこども代表「平和への誓い」の中で、「未来の人に戦争の体験は不要で
す。しかし、戦争の事実を正しく学ぶことは必要です。」この言葉は世界に共通し
て言えると私は思います。

8月6日、8時15分は唯一の被爆国日本が国籍、人種、性別、年齢を超えて様々
な人々が「平和を祈る」「平和の尊さ」を訴え続ける日。このことを、この日本と
いう国に生まれた私はこの先の人生において後世に伝えてゆく責務があると言え
ましょう。

核兵器を根絶し、世界の恒久の平和を切に願います。

小金井市の平和行事参加の旅に参加させて頂き、本当にありがとうございました。
参加できたことを感謝致します。

” 平和記念行事に参加して”

20代 女性

私は平和記念行事に参加して普段の日常生活では得ることのできない感情を得て、見るできない景色・風景を見て、平和への願いを募らせることができました。

平和記念資料館では当時の人々が使っていたものがたくさん展示してあり、原爆の被害・威力を自分の目で見ることができました。また、伝承者の方の貴重なお話も聞くことができました。その中で私は特に感じた思いがあります。原爆の被害を受けた人々は私達となにも変わらない日常を持っていた人々でした。それが原爆によって全て無くなってしまったのです。戦争が終わり幸せで平和な日々が戻ってくる未来を、数えきれない程の人が望んでいたと思います。戦争が激しくなるなかで必死に生きていた人がなぜ当たり前の日常や輝く未来を奪われなければいけなかったのか。資料館で見学中、そのようなことが頭から離れず、ずっと考えていましたが答えは出ませんでした。なぜならその問いに答えは存在しないからです。命を奪い未来を奪うことをしても良いという理由は絶対にありません。親・子ども・友人をなくし今もまだつらい思いをしている人々がたくさんいます。――奪われたものはどんなに願っても返ってくることは決してありません。人々の苦しみが癒えることもないでしょう。過去は変えられません。――未来はいくらでも変えることができます。人々の平和への願いを感じ、皆で力を合わせて平和な未来へ歩むことができれば同じ過ちが繰り返されることはない

と思います。ですが、核を保有し過ちが繰り返されるかもしれないことも事実です。もっともっと多くの人に戦争のこと、原爆のことを知ってもらい、世界に平和が訪れるように自ら行動にうつしていかなければならないと思いました。

” 平和と安全”

50代 男性

広島から戻って核への意識が高まると核兵器や原子力に対する感覚が敏感になったようです。ヒバクには被曝と被爆の単語が使われていて、どちらも「ひばく」と読みますが、意味は違い、曝(さら)されるという字の「被曝」は放射線を受け浴びるという意味で、爆発の字を使う「被爆」は原爆など爆撃によって被害を受けることを表すと知りました。

平和記念資料館では大勢の子供や若者達や外国人の方々と共に被爆の悲惨さを見聞させていただきました。被爆体験を伝承者のお話で聴くことができ、展示パネル・ビデオ・遺品等を通して核兵器使用は人の道を外れ、人間にはできない、正当性の欠片もない事だと改めて感じました。

そして被爆者の捜索救助に広島に入り被爆された方々の壮絶な闘病体験を通して気付かせていただいたのは、私が今まで核兵器と原発を別々に捉えていたことです。原子力の平和利用としての原発の安全性確保は被曝作業されている労働者の方々により維持されていて、その被曝により肉体的・精神的に作業員の方々の命を蝕んでいること。そして実際に原発事故が起きていることを決して忘れてはならないと思います。

現在、核弾頭ミサイルが日本上空を飛び交う恐れがあり、今後も核兵器がある限り、邪悪な権力者・指導者により、いつ使用されるかわかりません。それでも希望を持てるのは広島の状態を知ったことで不殺生を訴えるようになったという元朝鮮戦争従軍兵だったアメリカの平和学者の存在です。彼のように暴力容認か

ら一転して非暴力運動に身を投じ平和に貢献されている人々は人類の希望ではないでしょうか。

被爆者の皆さんの願いの実現に一步近づいたと言える今年7月7日の国連での核兵器禁止条約採択という世界平和の大潮流の中で、核廃絶と同時進行で反戦・非暴力社会を求め、世界中の人々と力を合わせて安全で平和な社会を実現してゆくことができると信じています。

あるニュージーランドの平和学者は、一般市民であってもその場所で平和のために貢献できると言っています。日頃から家庭や職場で誠実に穏やかに生活するように心掛けることが平和を保つことになり、平和は築かれるとして、教育・福祉制度・文化交流等が持続可能な平和な未来を築く大きな要素になると語っています。私も身近な平和を守り、育み、信じ、人や環境への貢献に取り組んでいきたいと思えます。

” 核兵器のない世界”

50代 女性

昨年、広島を訪問したオバマ前アメリカ大統領が訴え続けてきたのが「核兵器のない世界」です。

今回、平和行事参加の旅で感じたのは「核兵器のない世界」実現のため命懸けで叫び続けてきてくださったのが被爆体験の語り部の方々であり、伝承者の皆さん方であるという事です。

同行して下さった職員の方の奨めで原爆死没者慰霊式と平和記念式の前日に寺前妙子さんの被爆体験の伝承者としてご自身の被爆体験も交えて語られている胤森久子さんの講話を聴く機会に恵まれました。

核兵器による実に恐ろしい惨禍の生々しい様子を想像いたしました。また式当日の小学生による「平和への誓い」も印象に残りました。「当時小学生だった語り部の方は『亡くなった母と姉を見ても、涙が出なかった』と語ります。感情までも奪われた人がいたのです。」との部分に涙が溢れ出しました。

広島で、けたたましい蝉時雨の中、快晴の夏空を仰ぎ見るように真っ直ぐと立つヒマワリの花の姿を見かけた時、核抑止論や核肯定論の中、平和への強い信念を胸に被爆体験を語り続けていらっしゃる語り部や伝承者の方々の毅然とした生き方と重なりました。

被爆者の皆さんの願いが実を結んだその一つとして今年7月に「核兵器禁止条約」が採択されました。微力ではありますが、私もヒマワリがたくさん種を

らせるように、戦争の悲惨さ、命の大切さ、核兵器の違法性を次の世代に伝えて
いきたいと思います。